

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、 共著の 別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文)) 1. なし				
(著書(和文)) 1. ストループ・逆ストロープ効果 ー生成価と選択価の働きー	単著	1986年3月	東京都立大学人文科学 研究科心理学専攻 修 士論文 人修1059号 (総 115頁)	表象の変換と選択的注意の観点から、 ストロープ効果・逆ストロープ効果の 認知プロセスの特性について検討し た。
2. 問題分析による認知心理学入門 II (山下清美編) 1章「注意と 認知」. (佐々木めぐみ)	共著	1990年4月	日本電子専門学校, pp1- 32 (総32頁/127頁)	専門学校の授業テキストとして、人間 の注意機能について認知心理学の視点 から執筆した。
3. 現代のエスプリ 9巻「ストレス と過労死」: 大規模プラントに おけるストレスと情報処理 (佐々木めぐみ・箱田裕司)	共著	1991年9月	至文堂, p60-74(総15頁 /224頁)	原子力発電所などの大規模プラントで 働く作業員のストレスがどのようなも のかを分析し、ストレス下の情報処理 の特徴について述べた。現代のエ スプリ 9巻「ストレスと過労死」至文 堂p60-74の全文を執筆。連名者の箱田 はスーパーバイズのみをおこなった。
4. 認知科学のフロンティアⅢ, (箱田裕司編), 感情と認知の かかわりー色と感情語の研究か らー (佐々木めぐみ)	共著	1993年6月	サイエンス社, p38- 70(総33頁/193頁)	感情語から生起する色を同定し、色と 感情語の知識構造を検討した定量的研 究p38-70を執筆。
5. HALBAUによる研究の実際ー 注意力の認知心理学的分析ー (佐々木めぐみ)	共著	1993年6月	B a s i c 数学, 6月号, 現代数学社, pp66-71 (総6頁/92頁)	心理学実験データのパラメトリックな 基本統計分析方法を、ソフトウェアの 使用手順を具体的に示しながら、解説 した。p66-71を執筆
6. HALBAUによる多変量解析の実際 (高木廣文・柳井晴夫 編): 第7 章注意力の認知心理学的分析 (佐々木めぐみ)	共著	1995年1月	現代数学社, p95-109 (総15頁/198頁)	心理学実験データを多変量解析する ときの手順と結果の解釈を、ソフトウ ェアの使用手順を具体的に示しながら解 説した。p95-109を執筆
7. 知性と感性の心理ー認知心理学 入門ー トピックス 大規模 プラント とヒューマンエラー	共著	2000年10月	福村出版, pp229-230 (総2頁/261頁)	大規模プラントの制御にかかわる ヒューマンエラーのリスクを、個人、 システム全体、会社組織、社会、経済 的な側面から考察した。を執筆
8. 現代のエスプリ 431「医療行動 科学の発展」 ヒューマンエ ラーと医療の安全 (安藤満 代・渡辺めぐみ・箱田裕司)	共著	2003年6月	至文堂, p98-106 (総9 頁/212頁)	ヒューマンエラーの認知メカニズムに ついて分担執筆
9. メンタルヘルス&ケア ハンド ブック (内山源・秋坂真史編) 1章ー2 メンタルヘルスと社会 ・文化, 5章 思春期・青年 期のメンタルヘルス&ケア (渡 辺めぐみ)	共著	2008年6月	同文書院, pp5-11, pp95- 116 (総28 頁/285 頁)	社会文化の中でのメンタルヘルスのあ り方についての分析, p5-11, に執筆。 思春期, 青年期のメンタルヘルスとそ のケアについての特徴を分析した。 p95-116. を執筆した。

10.	逆ストループ干渉と精神疾患.	単著	2014年3月	九州大学人間環境学府 博士論文 新制甲第310 号(総188頁).	精神疾患のベースとなっている注意機能不全について、注意力検査である新ストループ検査の2つの指標(ストループ干渉・逆ストループ干渉)を用いて、精神疾患患者を対象として研究し、注意機能不全の特性とメカニズムを検討した。
11.	新・知性と感性の心理ー認知心理学の最前線 (行場次朗・箱田裕司編著) 16章ピククス:巨大技術システムとヒューマンエラー.	共著	2014年3月	福村出版, pp279-280. (総2頁/317頁)	福島原発事故を踏まえて、大規模プラントの運営にかかわるヒューマンエラーのリスクを、個人、社会環境、経済的な側面から考察した。P279-280を執筆した。
12.	注意機能とメンタルヘルス.	単著	2017年1月	心理学ワールド第76号 日本心理学会, p23- 24(総2頁/48頁)	メンタルヘルスの維持や不調からの回復に、注意制御機能が果たす役割、重要性をこれまでの著者の研究を元に考察した。小特集「基礎心理学と臨床心理学の架け橋」 p23-24を執筆。
13.	職場学習の心理学(伊東昌子編):10章緩和ケア看護師の変容的学習と適応的熟達 (<u>渡辺めぐみ</u>)	共著	2020年2月	勁草書房, pp167-186. (総10頁/218頁)	緩和ケア臨床における看護師の職場での学びは、どのような問題が隠されているかを論じ、適応的熟達の事例をあげた。
14.	職場学習の心理学(伊東昌子編):11章インクルーシブな職場環境をつくる学び (<u>渡辺めぐみ</u>)	共著	2020年2月	勁草書房, pp187-209. (総12頁/218頁)	障がい者の就労継続の困難さについて事例を元に心理学的に分析し、雇用者、支援者、当事者それぞれが職場環境で必要な学びを考察した。
15.	新ストループ検査で何がわかるか(箱田裕司・ <u>渡辺めぐみ</u> ・松本亜紀)	共著	2020年7月	トーヨーフィジカル pp3-8, pp13-15(総9頁 /17頁)	我々が開発・標準化した新ストループ検査IとIIの発達データ、臨床データの特性を紹介した。渡辺は検査Iの記述を担当した。
16.	ワードマップ心理検査マッピング(サトウタツヤ・鈴木朋子編) 4-10 ストループテスト	共著	2022年9月	新曜社pp216-219(総4 頁)	心理検査としてのストループテスト開発の歴史と検査としての有用性を解説した。
17.	職場がうまくいかないときの心理学(安藤史江, 芦高勇氣, 伊東昌子, <u>渡辺めぐみ</u> 編著)	共著	2023 年刊行 予定	有斐閣	職場で生じる様々な困難, ストレスを心理学的理論の枠組で解説し, ビジネスマンに対処法のヒントを提供する。筆者は, ストレス対処や発達障害者の就労の領域について記述する。
(学術論文(欧文))					
1.	なし				
(学術論文(和文))					
1.	集団用ストループ, 逆ストループテストー反応様式 順序, 練習の効果ー.(箱田裕司・ <u>佐々木めぐみ</u>)	共著	1990年12月	教育心理学研究 39, 389-394 (総6頁)	集団版ストループテスト作成のための, 順序効果, 練習効果を検討した。検査, データ分析についての記述を担当した。(査読有)
2.	逆ストループ干渉と精神分裂病ー集団用ストループ, 逆ストループテストを用いた考察ー(<u>佐々木めぐみ</u> ・箱田裕司・山上龍太郎)	共著	1993年4月	心理学研究, 64(1), 43-50. (総8頁)	統合失調症の患者におけるストループ, 逆ストループ干渉の特徴を検討した。全文担当。箱田は指導教官, 山上は調査病院の責任者のため付記。(査読有)
3.	手段ー目的階層に基づくヒューマンエラーの分類. (<u>渡辺めぐみ</u> ・志井田孝)	共著	2003年3月	日本情報テクノロジー学会 誌, Vol. 1, p41-46. (総6 頁)	ヒューマンエラーの分類法を, 観察実験データに基づいて記述した。 <u>全文担当</u> 。志井田は組織の長のため付記。(査読有)

4.	自己管理用ストレスチェックリスト作成のための予備的検討. (秋坂真史・志井田孝・渡辺めぐみ・松崎菜保子・木村正治・志井田美幸)	共著	2004年3月	教育医学, 49(4), 269-276. (総8頁)	自己ストレス管理に役立てるため、社会的・精神的ストレスがあるときに、心身に出現する症状リストを作成するための予備調査を行い、本調査を実施するための項目を作成した。項目リストの記述を担当した。(査読有)
5.	放射能臨界事故による学校児童生徒の心的外傷後症状に関する研究. (秋坂真史・渡辺めぐみ・志井田孝・石津宏)	共著	2005年8月	心身医学, 45(8), 607-617. (総11頁)	JCO臨界事故に際して、学校児童生徒にどのような心的外傷後症状が現れたかを調査し、明らかにした。東海村の心的外傷後症状調査データの集計と分析の分担執筆を担当した。(査読有)
6.	心療内科外来で自殺未遂、不登校生徒の改善に向け、ITおよび包括連携治療が奏功した臨床研究. (秋坂真史・渡辺めぐみ・志井田孝)	共著	2005年	日本心療内科学会誌, 98, 85-90. (総6頁)	心療内科外来に通院中の不登校生に対して、外来だけでなく、メール・電話などによるカウンセリングを統合的に実施した結果、生徒の心理状態が奏功した事例報告。臨床実践面の記述を担当した。(査読有)
7.	心因性精神障害患者のストレス自己管理のための個人用チェックリストにおける症状項目プールの作成. (秋坂真史・渡辺めぐみ・志井田孝)	共著	2006年6月	精神医学, 48(6), 643-651. (総9頁)	ストレス自己管理のために作成した個人用ストレスチェックリストの信頼性・妥当性を検討した。ストレスチェックの先行研究のレビュー、項目プールの信頼性と妥当性の調査データの収集・分析を実施し、その記述を担当。(査読有)
8.	長時間の運動は認知機能を低下させるのか. (松本亜紀・箱田裕司・渡辺めぐみ)	共著	2013年3月	日本情報ディレクトリ学会誌, 11, 18-27. (総10頁)	長時間の運動(登山)によって認知機能が受ける影響について、新ストループ検査を用いて検討した。心理的覚醒水準よりも運動による脱水症状によって認知機能に影響があることがわかった。新ストループ検査結果の分析と認知機能のアセスメントについて担当した。(査読有)
9.	ストループ・逆ストループ課題の切り替えコストと注意制御. (渡辺めぐみ・箱田裕司・松本亜紀)	共著	2013年4月	心理学研究, 84(1), 64-68. (5頁)	集団版ストループ検査遂行に必要な注意制御を明らかにし、検査でアセスメントできる注意機能を明らかにした。全文を執筆した。箱田、松本は共同研究者のため、付記。(査読有)
10.	タスクスイッチング研究におけるいくつかの問題. (箱田裕司・渡辺めぐみ)	共著	2015年7月	Japanese Psychological Review, Vol. 58, No. 1, 52 - 54. (総3頁)	タスクスイッチングパラダイムを用いた研究における佐伯論文の位置づけと問題点を示した。(査読有)
(紀要論文)					
1.	Computerized Colour Pyramid Test (CCPT) の開発 (井上カーレン果子・佐々木めぐみ・松井豊・伊藤洗)	共著	1990年3月	立川短大紀要23巻, pp7-11. (総5頁)	コンピュータを用いて実施するカラーピラミッドテストを作成するために、画面上にできる色の選択と評価および、その記述をおこなった。P9-11を執筆。(査読有)
2.	新ストループ検査における2種の干渉と反応様式. (箱田裕司・佐々木めぐみ)	共著	1991年3月	九州大学教養部カウンセリング学科論文集, 5, 69-81. (総13頁)	注意力検査の一つである新ストループ検査では、指標としてストループ干渉と逆ストループ干渉の二つがえられる。検査を実施する場合に、口頭反応かマッチング形式反応かによる反応様式の違いによって、この二つの干渉率にどのような違いがみられるのかを統計的に検討した。(査読無)
3.	同時言語報告の妥当性に関する研究の現状. (渡辺めぐみ・高橋秀明)	共著	1993年9月	JAERI-M 93-166 9月 (総36頁)	ヒューマンファクター研究で用いられるプロトコル分析の妥当性に関する現状の研究状況をレビューした。全文を執筆した。(査読無)
4.	同時言語報告法における言語化の影響の実証的検討. (渡辺めぐみ・高橋秀明)	共著	1993年9月	JAERI-M 93-165 9月 (56頁)	ヒューマンファクター研究で用いられるプロトコルデータを採取し、言語化することが作業、心理に及ぼす影響を分析した。全文を執筆した。(査読無)

5.	ストレス症状自覚テスト作成に向けた臨床心理学的研究 ー第1次調査結果に関する検討ー。(秋坂真史・渡辺めぐみ・松崎菜保子・木村正治・志井田美幸・志井田孝)	共著	2003年3月	茨城大学教育学部紀要, 52, 289-294. (6頁)	ストレス反応症状の個人差を検討するため、参加者が自由記述によって収集した自分のストレス症状を集計し、ストレス症状リストを作成した。(査読無)
6.	集団版新ストループ検査におけるストループ・逆ストループ干渉率の発達の変化。(渡辺めぐみ・箱田裕司・松本亜紀)	共著	2011年3月	九州大学心理学研究, 12, 41-50. (総10頁)	集団版ストループ検査のパフォーマンスの発達変化データを採取し、結果を分析し、論文全文を記述した。箱田、松本は共同研究者のため付記。(査読有)
7.	新ストループ検査は注意機能の臨床評価ツールとなりうるか?。(渡辺めぐみ・箱田裕司・松本亜紀)	共著	2013年3月	九州大学心理学研究, 14, 1-8 (総8頁)	臨床上の注意機能評価にどのような検査が用いられたかをレビューし、新ストループ検査の有用性を検討した。論文全文を記述した。箱田、松本は共同研究者のため付記。(査読有)
8.	東日本大震災後3年間で心療内科クライアントにみられた社会生活の再構築。	単著	2015年3月	九州大学心理学研究, 16, 9-15. (総7頁)	心療内科の患者達が、震災体験を通して、自分と世界の認識と行動を変化させ、社会との繋がりを回復する外傷後成長を記述した。(査読有)
9.	緩和ケア臨床に携わる看護師の変容的学習と適応的熟達化。(渡辺めぐみ・伊東昌子・角智美・三橋彰一)	共著	2020年3月	常磐大学 学術論究, Vol. 6&7, 11-23. (総13頁)	緩和ケア臨床における看護師の職場での学びについてアンケート結果を基に職場での学びのプロセスを考察した。(査読有)
10.	集団版新ストループ検査IとIIの比較ーストループ・逆ストループ干渉へおおよぼす課題実施時間の効果。(松本亜紀・箱田裕司・渡辺めぐみ)	共著	2020年3月	北九州市立大学文学部紀要, vol. 27, 1-12. (総12頁)	注意力検査の一つ、新ストループ検査には、課題実施時間が40秒の検査Iと60秒の検査IIがある。実施時間の違いによって、干渉率、パフォーマンスで違いが生じる点と、共通のパフォーマンスが得られる点を統計的に検討する中で、検査Iの分析について担当した。(査読無)
11.	広場恐怖に対する注意機能の心理療法的支援ー感情制御プロセスの注意の方向付けへの介入の重要性ー。	単著	2020年4月	常磐大学心理臨床センター紀要, Vol. 14, 3-16. (総14頁)	広場恐怖を伴うパニック障害のクライアントに対して、感情制御プロセスモデルに基づき注意の方向付けを支援する心理療法を実施し、寛解した事例を報告した。(査読有)
12.	周トラウマ期性解離としての全生活史健忘からの回復ケースにみる、自伝的記憶、自我状態、時間知覚の変容	単著	2021年3月	常磐大学心理臨床センター紀要, Vol. 15, 3-19. (総17頁)	交通事故を機に全生活史健忘を呈したケースにEMDR、ホログラフィートークなどを実施し、自伝的記憶を回復するプロセスにおいて見られた自我状態の変化、時間知覚の変容について報告した。(査読有)
13.	知的能力障害のない発達障害者へのプロセスコンサルテーションと職場適応スキルの向上。(渡辺めぐみ・伊東昌子)	共著	2022年3月	人間科学部紀要第39号, 47-56 (総10頁)	文献レビューから障害者雇用・就労では現行の対策や支援がジョブマッチングに焦点があてられており、適応的なキャリア育成の観点からの実践や研究未開拓の状態であることを示した。キャリア支援のタイプが複数ありその中の、プロセスコンサルテーションが実践場面では有効であることを当事者側と支援者側の1事例を通して示した。(査読無)
14.	不安の強いクライアントの注意の切り替え機能の困難ー切り替え版新ストループ検査結果の事例報告ー	単著	2022年6月	常磐大学心理臨床センター紀要, Vol. 16, 17-28. (総12頁)	不安の強い人の注意機能の特徴として、色刺激の抑制が弱くなることと、注意の切り替え機能が落ちることを事例を通して示した。(査読有)
15.	発達障害者の継続的就労とキャリア形成ー個の組織社会化から組織のインクルージョン戦略へー(伊東昌子・渡辺めぐみ)	共著	2023年3月	成城大学経済研究所研究報告 No. 96, 1-30. (総30頁)	組織社会化の観点から、文献および事例報告のレビューにより、障がい者就労の現状の問題点を明確化する。障がい者雇用が授業所によって資産となるための、インクルージョン戦略について考察した。渡辺は、障がい者雇用の現状および、障害者支援の問題点について、事例をレビューした。(査読無)

16. 安定化セラピーが自律神経活動と主観的障害単位に与える影響とその個人差	単著	2023年3月	常磐大学心理臨床センター紀要, Vol. 17, 1-14. (総14頁)	トラウマセラピーを実施する準備として、必須の安定化セラピーが、クライアントの自律神経の安定および主観的な安全感覚に効果があるのかを検討した。不安が強いクライアントには、自律神経のリラクセスと主観的安全感に乖離があることが明らかになった。
(辞書・翻訳書等)				
1. ラックマン, R. 著 認知心理学と人間の情報処理Ⅱ 第六章”意識と注意”(箱田裕司・鈴木光太郎 監訳 渡辺めぐみ 分担翻訳)	共著	1988年11月	サイエンス社, pp247-283. (総37頁/458頁)	意識としての注意, 選択的注意における記憶過程, 処理容量としての注意について, 実験的検討を元に解説している箇所の翻訳をした。P 247-283を執筆した。
2. A. ウェルズ・G. マッシュューズ共著 心理臨床の認知心理学 第5章”注意における感情バイアス: 理論的問題”(箱田裕司・津田彰・丹野義彦 監訳 渡辺めぐみ 分担翻訳)	共著	2002年9月	培風館, pp108-135(28頁/421頁)	注意機能に感情のバイアスがどのように影響するか, 心理学的モデルの提示と実験的研究の紹介をしている箇所の翻訳。p108-135を執筆
3. 心理学辞典(子安増生, 丹野義彦, 箱田裕司 他 監修 渡辺めぐみ 分担執筆)	共著	1999年1月	有斐閣	注意, などの項目を分担執筆
4. 公認心理師対応, 心理学辞典(子安増生, 丹野義彦, 箱田裕司 他 監修 渡辺めぐみ 分担執筆)	共著	2021年2月	有斐閣	ストループ干渉, 既知感, スタンバーク課題 スリップ, チャネル/チャネル容量, フィルター理論, ベントン視覚保持テストなど14項目を分担執筆
(報告書・会報等)				
1. 色と感情語の概念的関連の検討-印象的な広告文を作るために-	単著	1990年7月	平成元年度 助成研究集(第23次)要旨, 財団法人 吉田秀夫記念事業財団, p233-249 (総17頁)	色によって想起される概念, 感情語から想起される色との相互関連を認知心理学的手法を用いて検討した。喜び, 怒り, 悲しみなど感情語には異なる色相, 彩度の色が対応することがわかった。
2. ヒューマンファクタを考慮にいれたマンマシンシステムの設計および複数メンバー間におけるエラー伝播の研究. (田辺文也・山口勇吉・渡辺めぐみ)	共著	1996年5月	科学技術庁科学 技術制作局 システムと人間との調和のための人間特性に関する基礎的基盤的研究成果報告書. pp77-95 (受託研究) (総19頁)	複数メンバーで実施する作業における, システムと仕事の学習過程とメンバー間の協力過程について実験的に検討し, 考察した。p1-40と付録資料を執筆。
(国際学会発表)				
1. コンピュータメンタルヘルス診断システムの開発-注意力診断テストの意義-. (渡辺めぐみ, 井上果子, 伊藤洗, 鈴木寿治, 松井豊)	共著	1993年8月	世界精神保健連盟1993年世界会議(WFMH'93), 抄録集, p244. (総1頁)	コンピュータメンタルヘルス診断システムの妥当性・有用性を示した。(口頭発表, 発表者)
2. Individual Difference of Subjective Symptoms of Stress. (Watanabe, M., Shiida, T., Akisaka, M., Matsuzaki, N., & ...)	共著	2002年8月	X II World Congress of Psychiatry ABSTRACTS, Vol. 2, p127(総1頁)	主観的なストレス症状と不安の関係を示した。(ポスター発表)
3. Relationship between Switching Attention, Arousal Level and Immune-Endocrine Secretion -In the Group Version of the Stroop and Reverse-Stroop Test- (Watanabe, M., Hakoda, Y., Nomura, S., & Matsumoto, A.)	共著	2009年9月	SARMAC VIII 29th July Kyoto Heian Kaikan Program R-WedPm-2-2 p49. (総1頁)	不安障害, うつ病患者の注意の切り替え機能と生理反応, 覚醒レベルの変化の関係を示した。(口頭発表, 発表者)
4. ICP 2016 symposium stroop & reverse stroop ISK-UDX [2000168] Stroop & Reverse-Stroop interference as cognitive control: The relationship between mental disorder and Stroop / Reverse-Stroop interference.	単著	2016年7月	ICP2016 Yokohama, Japan, 27 th July, 2016	ストループ検査を用いて, 統合失調症, うつ・不安患者の注意機能特性を示した研究結果を発表した。(口頭発表, 発表者)

(国内学会発表) 2014年以降を掲載

1.	安定化セラピーが自律神経に与える影響.	単著	2014年9月	日本心理学会第78回大会発表論文集, 4. 臨床障害 3EV-1-018, p476. (総1頁)	トラウマ治療に必須の安定化セラピーが個人々の自律神経特性によって効果が異なることを示した。
2.	安定化セラピーへの自律神経反応特性 2-幼少期のトラウマ, 家庭環境の影響ー.	単著	2015年9月	日本心理臨床学会第34回秋季大会 大会発表論文集, 基礎・調査研究PB3-27, p434. (総1頁)	安定化セラピーの効果の違いは, 個人々の幼少期の生育歴の違いに影響されることを示した。
3.	緩和ケア病棟で働く心理士の活動の実際. (渡辺めぐみ・中村君子)	共著	2016年9月	日本心理臨床学会 第35回秋季大会 PB3-42, p 459. (総1頁)	2つの総合病院の緩和ケアで働く心理士の活動を調査し, 緩和ケア臨床の活動内容, 困難さ, 臨床的意義等について報告した。
4.	注意の切り替え機能に加齢の影響はあるか? ストループ・逆ストロープ干渉の非対称性からの示唆. (渡辺めぐみ・箱田裕司・中村知靖・松本亜紀)	共著	2017年9月	日本心理学会 第81回大会発表論文集, 9認知3B-049, 612. (総1頁)	注意の切り替え機能に加齢に伴う変化の特性を示し, 報告した。調査, データ整理, 執筆すべて渡辺が実施。箱田, 松本は, 研究のスーパーバイズ, 中村は調査の場を提供していただいた。
5.	全生活史健忘からの回復過程-記憶想起が可能な自我状態とは?	単著	2018年8月	日本心理臨床学会第37回大会発表論文集. 口頭発表 (事例研究) 0A1-07, p30. (総1頁)	交通事故をきっかけに全生活史健忘を発症したクライアントの回復過程で, 交通事故のトラウマ処理だけでなく, 幼少期に家族内で受けたトラウマ治療が必要であり, 解離性障害の治療が有効であったことを示した。
6.	もの忘れ外来患者における注意機能検査 (新ストロープ検査) の指標と脳萎縮との関連. (渡辺めぐみ・鯨岡裕司)	共著	2018年10月	第37回認知症学会発表抄録集 ポスター討論 322, p485(総1頁)	もの忘れ外来の患者を対象に, 脳萎縮と新ストロープ検査の関連を検討した。ストロープ検査の指標が特定の部位の脳の萎縮と関連が深いことを発見し, 示した。ストロープ検査の実施, データの整理, 執筆は渡辺が, 脳萎縮の知見については脳外科医の鯨岡が担当した。
7.	緩和ケア臨床に携わる看護師の変容的学習. (渡辺めぐみ・伊東昌子・角智美三橋彰一)	共著	2019年9月	日本心理学会 第83回大会発表論文集, ポスター発表 2B-026: 4. 臨床・障害, p330(総1頁)	緩和ケア臨床を実践する看護師の熟達化に伴う変容的学習に焦点をあて, その変容の内容的側面, 変容の過程, 期間について検討した。緩和ケアにおける適応的熟達は, 看護技術の熟達だけでなく, キャリア3年以上になると自己の価値観の変容も伴いながら, 患者の全人的ケアを扱うために必要な実践知を備えていくことが示された。
8.	実験認知心理学の知見に基づくストロープ課題の臨床現場への応用. 認知臨床で役立つツール・新ストロープ検査 I-注意の切り替えと精神疾患ー	単著	2019年9月	第37回日本心理学会 自主シンポジウムSS-094 (総1頁)	注意機能検査である新ストロープ検査が認知症診断や心療内科の治療においてどのように利用され, 役に立っているかをデータに基づいて示した。
9.	注意機能検査と長谷川式簡易知能評価スケールとの関連ー鬱傾向の有無による違いー (渡辺めぐみ・鯨岡裕司)	共著	2020年11月	日本認知症学会誌, 34, 第39回認知症学会発表抄録集 ポスター討論P167, p500. (総1頁)	もの忘れ外来の患者を対象に, 注意機能検査である新ストロープ検査と長谷川式簡易知能評価スケール (HDS-R) との関連を患者にうつ傾向があるかどうかを区別して検討した。うつ傾向がない場合は, ストループ干渉がHDS-Rと強い関連があることが明らかになった。認知症の早期診断へのストロープ検査の有効性を示した。

10. 発達障害者雇用に求められる人間中心設計の新たなステップー職場学習とキャリア育成への支援ー(渡辺めぐみ・伊東昌子)	共著	2021年6月	2021年度春季HCD研究発表会予稿集, p53-58.	人間中心設計では、障がい者に対するバリアフリーやアクセシビリティなどの合理的配慮は進んでいるが、職場での学習やキャリアパスなどの支援環境についての議論は進んでいない。発達障害者への支援の変遷を振り返りながら、プロティアンキャリア支援につながる支援の可能性・方向性をケーススタディを通して探った。
11. 発達障害者の模索型キャリア育成モデルー自己理解と支援環境の促進を促す職場環境に向けての支援のあり方, (渡辺めぐみ・伊東昌子)	共著	2021年8月	日本応用心理学会第87回大会抄録集 2021年8月29日 口頭発表 OR-05. p18	知的能力障害のない発達障害者が就労に際して適応的スキルを変容させることができるのかを当事者および支援者への調査を通して明らかにし、障害者へ自律的・主体的にキャリアを形成するために必要な支援とはどのようなものかの端緒を探った。
12. 新ストループ検査が示す加齢の影響ー正答数と干渉率の違いに注目してー(芦高勇気・渡辺めぐみ)	共著	2021年9月	第84回日本心理学会大会発表抄録集PI-011, p116 (WEBポスター発表)	本研究では、新ストループ検査の正答数とストループ干渉 (SE) の加齢の影響の違いについて調べ両者の示す機能の違いを考察することを目的とした。SEは、7歳～70代中15-17歳を底とするU字型の発達変化を示し、加齢に伴う認知障害との関連が示唆されている。正答数は20代から徐々に減少する傾向にあり、SEとは異なる加齢変化を示している。本研究では新ストループ検査に加えて、この検査とは選択肢の数 (または5選択) などの一部の条件が異なるストループ課題と、ワーキングメモリ (WM) 課題とを実施した。参加者は25歳から65歳までの健常な46名であった。結果、正答数は5選択の条件のときのみWM容量と相関があり、SEは全ての条件でWM容量と相関を示さなかった。20代からの60代の正答数の緩やかな減少はWM容量の加齢変化を反映し、SEで求められる抑制機能とWMの異なる加齢の影響を示していることを示した。(著者は目的を設定し、従来の新ストループ検査結果と本研究データの考察およびその文章化を担当した。芦高が方法を発案し実験をおこなった。)
13. 注意の切替と抑制との相補的制御における加齢の影響ー新ストループ検査の手法を応用した検討ー(芦高勇気・渡辺めぐみ)	共著	2022年9月	第85回日本心理学会大会発表抄録集 3AM-038-PI, p503(ポスター発表)	本研究では、注意の切替機能、抑制機能、WM容量の間の相補的制御の加齢の影響を調べることを目的とした。一般的に色次元の処理を抑制することは単語次元の処理を抑制することに比べ容易であるが、注意の切替を要するときには、比較的容易である色次元の処理の抑制にむしろ加齢の影響が現れることが示唆された。また、総じて、中年と高年では、注意の切替機能の低下による処理の潜在的なエラーを抑制機能によって顕在的なエラーとならないようにする相補的な制御が示唆された。業務においては、複数の作業の情報と同時に重ならないような環境を整えるなど、本人の抑制機能に依存しないことが有効と考えられた。(著者は目的を設定し、従来の新ストループ検査結果と本研究データの考察およびその文章化を担当した。芦高が方法を発案し実験をおこなった。)

14. 組織社会化プロセスで発達障害者が抱える学習困難性の検討 (渡辺めぐみ・伊東昌子)	共著	2022年9月	日本応用心理学会第88回大会抄録集作成中 2022年9月18日 ポスター発表	知的障害のない発達障害者が就労を継続するときに抱える困難を事例に基づいて、組織社会化における学習の問題として分析し、外部支援の求めかたについて考察した。(筆者が、データ分析と考察をおこない、伊東が全体の考察をおこなった。)
15. 立体ストループ課題遂行プロセスの加齢変化-エラーの発生と修正過程の観察-(芦高勇気・渡辺めぐみ)	共著	2022年12月	日本基礎心理学会第41回大会抄録集, p 45, 2022年12月3日 ポスター発表	立体ストループ課題を用いて、遂行中のエラー動作とその修正動作に表れる加齢の特徴を調べた。若年者はエラー動作が駆動しても、いったん中断して動作の修正が可能なのに対して、高齢者では、ストループ条件でのエラーが増大し、エラー動作が終了して結果を見てからでないと修正できないことが明らかになった。(筆者が、実験計画と考察をおこない、芦高が実験実施、結果の整理、考察をおこなった。)
16. 個人が知覚する音楽テンポと内受容感覚の精度との関係 (矢ノ倉萌・渡辺めぐみ)	共著	2023年7月	日本認知心理学会大会抄録集作成中 2023年7月1日 ポスター発表	音楽テンポの知覚と心拍数や内受容感覚の精度の関係を実験で検討した。参加者には基準刺激と比較刺激の差を視覚的尺度で回答させ、主観的等価点(PSE)とテンポが実際に位置する基準点の差を得た。実験前後に心拍数測定と内受容感覚として心拍数の自覚回数の報告を行わせた。独立変数に基準刺激と心拍数の差または内受容感覚の精度を加えた二要因分散分析を行うと、群間の差に前者では有意差がなく後者では有意傾向が見られた。テンポ倍率が0.7倍と0.8倍の時、内受容感覚が高精度な群の方がPSEと基準点の差は有意に小さく、内受容感覚の精度がテンポ知覚に関わることが示唆された。(矢ノ倉が実験を計画しデータを収集・分析した。筆者は方法と考察にアドバイスをした。)
17. インクルーシブ職場環境評価の枠組み作成の試み-知的障害のない発達障害者のキャリア構築にむけて-(渡辺めぐみ・伊東昌子・岡田麗子)	共著	2023年8月	日本応用心理学会第89回大会抄録集, pp92 2023年8月27日 ポスター発表2A-10	障害者の就労に関しては、個人のスキルや態度に関する指導や訓練とは別に、柔軟な組織社会化が可能なように、障害者だけではなく、事業所の障害者対応の意識とスキルの改革と外部支援組織との連携が必要である点で、インクルーシブな文化への組織学習の開発も視野に入れる必要がある。そこで本研究では事例研究に基づき、事業所、支援者、障害者の3者で活用できる職場環境評価の枠組みを作成することを試みた。(伊東が文献調査をおこない、筆者と共に理論的枠組みのプロトタイプを作成。岡田が事例を提供して、筆者がまとめた)

18. 注意切り替え機能作業検査の信頼性・妥当性 集団用切り替え版新ストループ検査で測定される注意制御機能の特性 (渡辺めぐみ・芦高勇氣・松本亜紀・中村知靖)	共著	2023年9月	第86回日本心理学会大会発表抄録集(ポスター発表) 2A-055-PI	箱田・佐々木(1990)の新ストループ検査を元に、渡辺・箱田(2013)は切り替え版新ストループ検査を作成した。本稿ではこの切り替え版検査の信頼性と妥当性を検討することを目的とした。再テスト法で得られた切り替え版の各課題正答数内に有意な相関がみられ、課題2以外の課題で得られた α 係数の値からは内的一貫性が示されたことから、課題2以外での信頼性が示された。課題2と課題2から算出される逆ストループ干渉率は個人内の何らかの変動に影響を受ける注意機能指標であり、変動要因を検討する必要があることが示唆された。切り替え版検査の課題正答数は標準版のそれらと有意な高い相関があり、複合数字抹消検査の達成数、誤答率、選択的注意の維持が求められる刺激の正答率などとも有意な相関が見られたことから、注意制御機能を測定する作業検査としての妥当性が示された。標準版と切り替え版で測定される指標とでは、関連する指標に違いがみられることから、異なる注意機能の指標となると考えられた。(筆者が実験を計画しデータ収集・分析した。芦高は考察の議論に加わった。松本、中村は実験データの収集に協力した。)
19. 作業時のエラーの発生・検出・修正過程の加齢変化 立体ストループ課題の遂行過程の観察 (芦高勇氣・渡辺めぐみ)	共著	2023年9月	第86回日本心理学会大会発表抄録集(ポスター発表) 3A-029-PI	芦高・渡辺で考案した立体ストループ課題を用いて、高齢者の作業遂行過程で生じるエラーの特性とその検出・修正プロセスを分析した。中年では若年と比べて、エラー発生率が高いもののエラー検出率は高くはないため、正答率が低かった。高年ではエラーの発生率が中年よりもむしろ低かったが、エラーを検出してその修正成功率が低いため正答率が低かった。つまり、中年と高年ではエラーの発生・検出・修正・正答までのプロセスが異なっていた。高年では、慎重に取り組むことでエラーの発生を抑え、加齢による注意機能の低下を補って正確性を高めていたと考えられる。しかし慎重に取り組んだ上で発生したエラーへの対処には、若年・中年に比して困難なことが明らかになった。(芦高と筆者で実験計画を立て、芦高が実験・データ収集・分析を行った。結果の考察を芦高と筆者で行った。)
(演奏会・展覧会等) 1. なし				
(招待講演・基調講演) 1. シンポジウム 「児童生徒の安全とメンタルヘルスをどう守るか?—現状と課題—」 2. 新ストループ検査ではかる注意力とは?—干渉にひそむ切り替えコスト—	単独 単独	2006年8月 2013年9月	第54回日本教育医学会宮崎大会, 教育医学, 第52巻第1号, p25 日本心理学会第77回大会 自主シンポジウム,	児童生徒のメンタルヘルスの現状と課題について、心療内科の面接とスクールカウンセラーにおける経験を元に、知見を述べた。 新ストループ検査でアセスメントできる注意機能について、精神疾患患者のデータを元に述べた

3.	震災後に生じた心療内科クライアントの社会性の再構築ーレジリエンシー多重モデルBasicPhからの考察ー	単独	2013年9月	日本ディレトリ学会公開シンポジウム「東日本大震災から何を学んだのか、これからどう生かすか？」	震災体験後、社会生活を再構築したクライアント達の心理的变化について、認知行動療法の視点から分析し、講演した。
4.	逆ストループ干渉と精神疾患	単著	2015年9月	日本心理学会第79回大会 名古屋大学 2015年9月24日. 小講演	精神疾患患者における逆ストループ干渉の特性を明らかにし、精神疾患の注意機能評価に逆ストループ干渉が有用なことを精神疾患患者のデータをもとに述べた。
5.	認知心理学の医療への貢献：臨床で注意機能検査が役立つ理由：精神疾患治療・認知症診断での利用の実際	単著	2018年11月	日本認知心理学会公開シンポジウム 認知心理学のフロンティアX ー司法・医療への貢献 予稿集資料 (総2頁)	認知症診療および精神科・心療内科診療のアセスメントにおける注意機能検査の有用性を認知科学データに基づいて解説した。
6.	ブレインスポッティングとEMDRの使い分けと融合(太田茂行・渡辺めぐみ・深谷篤史)	共著	2021年11月	第2回ブレインスポッティング研究大会抄録集, シンポジウム, p14.	トラウマ治療の心理療法として用いられるブレインスポッティングとEMDRの使い分け, 融合についてケースを通して解説した。
7.	新ストループ検査誕生秘話と現在	単著	2023年3月	箱田裕司先生を偲ぶ会ワークショップ	新ストループ検査の開発と発展のプロセスおよび検査を用いた研究の成果を発表した。

(受賞(学術賞等))

1. なし

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択)					
1. 最新の実験認知心理学の成果に基づくストループ検査法	分担	研究助成基金助成金 (基盤研究C)	2018年	97,500円	ストループ効果・逆ストループ効果の認知科学的研究
2. 日本認知心理学会公開シンポジウム 認知心理学のフロンティアX ー司法・医療への貢献	分担	研究成果公開促進費補助金	2018年	32,500円	臨床心理学領域での認知心理学の貢献を明らかにする研究
(競争的研究助成費獲得(科研費除く))					
1. 色と感情語の概念的関連の検討	代表	財団法人 吉田秀夫記念事業財団 助成金 大学院生の部	1989年	100,000円	日常使用する感情語と色との対応を分析し、色から様々なイメージされる感情は、感情語と同様の知識構造に対応するのかを認知心理学的手法により検討した。

(共同研究・受託研究受入れ)					
1. 鉄道係員等の注意機能に関する研究についての共同研究	代表	株)西日本旅客鉄道 安全研究所との共同研究	2020年	990,000円	<p>本研究は、新ストループ検査を中心としたツールを使って、高齢者の注意機能特性を研究し、高齢者作業員の鉄道運行の安全性を高める支援システムの構築に寄与することが目的である。</p> <p>2020年度の実験では、新ストループ検査の手順を分解して実験・分析することにより、加齢に影響を受けやすいプロセスと受けにくいプロセスがあることを、バス解析を用いて示した。高齢者の認知プロセス鈍化傾向は、加齢による処理スピードの鈍化とWM容量の低下の2つの要因で説明できることが先行研究で示されている。本研究では、この2つの要素が新ストループ検査の課題3、4には深く関わっており、課題1と2にはあまり関わっていないことが示された。特に加齢とWM容量に関わる課題4と加齢やWM容量とは関わらない課題2の違いが明らかになった。一般的に、定年前の世代で「作業遂行が遅くなる」と大雑把に評される中にも、加齢の影響が強く表れる作業とそうでない作業を分離できれば、高齢者従業員を有効に使える可能性を示唆した。</p>
2. 鉄道係員等の注意機能に関する研究についての共同研究	代表	株)西日本旅客鉄道 安全研究所との共同研究	2021年	604,500円	<p>注意の切り替え機能の加齢変化を検討する実験を、20代、50代、60代の健常者を対象に実施した。実験結果からはシニア世代の者が複数の課題に取り組まなければならない場合でも、複数の課題を同時に行うのではなく個別に行うことや、トップダウンによる切替の必要のない作業環境を整えることによって、業務等の加齢に伴う効率低下を抑えることができる可能性を得た。2021年度2-3月には、これまでのストループ検査法等を用いて得られた研究成果を業務へ応用することを目指して「動作の伴う課題」を新しく作成して検証実験を行った。検証実験の実験条件は、課題遂行時にトップダウンの注意制御が必要な条件と“加齢対策”としてトップダウン制御が必要ない環境を整えた条件を設定し、2つの条件間において、高齢者・若年者のパフォーマンスの違いが生じるかどうかを検証することとした。結果は次年度に分析することとなった。</p>
3. 鉄道係員等の注意機能に関する研究についての共同研究	代表	株)西日本旅客鉄道 安全研究所との共同研究	2022年	508,300円	<p>再雇用で働く現役シニアの加齢に伴う注意制御の特性を調査し、特性を活かした業務構成の設計とエラー予防対策に役立てることをめざし、エラーに関連する注意制御の特性を調べるとともに、注意制御の特性を測定する手法の開発を進める。</p> <p>内容：鉄道係員等の注意機能に関する研究についての共同研究において、2020年度はトップダウンの注意制御が必要とされるとき、加齢の影響がより強くパフォーマンスに反映されることを明らかにした。2021年度は、2020年度の知見をもとに、パフォーマンスへの加齢の影響を小さくするための注意機能支援を付加した実験的作業課題を考案し、実施した結果、一定の成果が得られた。そのため、2022年度においては、2021年度の実験結果から得られた知見を鉄道係員などの実務への応用をめざした検討を行う。</p>

(奨学・指定寄付金受入れ)					
1. なし					
(学内課題研究(共同研究))					
1. インクルーシブな職場環境の設計にむけた、発達障害者の職場学習と自己成長の研究	代表	課題研究／共同	2021年	202,000円	知的能力障害がないが発達障害を抱えながら就労する方々が経験する困難と学びを通じて、自己成長に関わる心理的变化が生じているか否か、キャリア育成するために必要な支援とは何かを当事者へのアンケートやインタビュー調査を通じて検討する。さらに職場の雇用主、上司、同僚達が、発達障害者らと共に働くときに生じる困難の内容、その困難に対処するために必要な支援を現場の調査に基づいて明らかにする。 知的能力障害がないが発達障害を抱えながら就労する方々が、会社組織の中で社会化し、定着していくためにはどのような支援が必要かを考察するために、事例分析・文献資料分析などを通じて、社会化のプロセスで生じる学習困難を明らかにする。
2. インクルーシブな職場環境の設計にむけた、発達障害者の職場学習と自己成長の研究	代表	課題研究／共同	2022年	245,000円	
(学内課題研究(各個研究))					
1. なし					
(知的財産(特許・実用新案等))					
1. なし					